

久お松そめ

袂
の
白
し
ほ
り



おそめ
久松 袂の白しぼり

上之卷

作者 紀海音

地難波風賢者も富めり君が代は。天の羽衣唐錦朝鮮綸子高麗橋。三井が見世に山たゝむ。フシ雪の巖の掛直なし。地銀さへあれば今云うて今も調ふ身のまはり。春待袖の殊更に武士は角ある上下に。御紋の時服一重請取注文算盤の。儉約な顔も町人は。僭上張つてよい衆に。似せ八丈はしまつげな。婆も孫子も着衣始。うら珍しき中紅絹の入掛買うて行くも有り。法師は人も木の端と。云へば綸子の切端を。丸縮帯の末にては。フシめぐり逢うてふ主やこの。戀の日の出や。東堀。白齒も纏ておそめとて。誰に思ひの種油。締めて寢油二親の。光は有れど暗きより。暗がり好の豫言を知らぬ仲居や乳母連れて。嫁入小袖の模様より目は久松に行道の。三井が見世に立寄れば。地色乳母ちよこくと走り入り。ハア藤七殿今日は。奇特とお宿にござんする。奥様からの御言傳。毎日こちへござつても模様がお氣に入らぬから。無駄足ひかす氣の毒などうて買はねばならぬ物。主をばそれへ遣りまする數々見せてあげすけに。地頼みますとの云付てアレお染様わざくと。お出なされました早に。オクリ伴ひへ内に入りにけり。地色若盛なる手代ども目を見合せて突きしろひ。瓦屋橋と開及ぶ。油壺から取出した髪の艶から地合から。あの様な縞子が有らうなら中の島のお屋敷に。祝言前ちや百本でも忽ち金にせうものと。見る物くはう仇思。フシ是頤の霰なり。お染は何の氣も付かず藤七に笑顔して。飼色品變る模様どもたびく見せて貰へども。氣むつかしさに取紛れすげなう云うて戻

せしが。地色今日は心も暗れやかさに慰みがてら染小袖。見ませうために参りしと。おめた所を手入らずと。フシ世上に是をたふとがる。詞藤七は慥慥に。何よりかより御氣分の良いと聞くのがお頼もし。幸ひ今朝下りたる染物多くある中に。見るから粹と白給子に五色の絲で縫付ける。地京大坂の菊合せ千歳の秋を八重桐が。舞臺衣裳の物好み。御氣に入らぬ事あらじと自慢顔して差出す。地色乳母や仲居は立ちかゝり。詞コレは是になされませ。是を召したら取成も八重桐に生寫し。地よかるくと囁きども久松一人餘所目して。詞淫奔らしい藝振にうつつて男こま付けて。京大坂に浮名立ち身の行末を八重桐が。地狂言にして貰うたら泣くであらうと呟くを。人は何とか白菊のお染も色に現はれて。菊の一夜を千夜とも頼みし仲は變らねど。うつろふ菊のあだ名こそ。フシいまいましやと撞遣れば。詞藤七は心得て。然らば是になされませ。庫に名をば咲かせたる花紫が物好きに。我名を衣に染色のおり縫ひ織紋織節の。地花の色繪のあしらは黒人仲間によしといふ上なき模様候ふと。詞飾れど久松は。詞いやくは是も心得ぬ引手あまたの傾城の。地どう根性を似せ紫。とゝろ剝けたは見苦しと顔打赫め言ひ消せば。乳母仲居は腹立てて。詞こりや其處な者何をいふ。流行模様の善悪を。お主らが辯口な。地黙つて居やと叱れどもお染は暫し俯きて。詞いや久松の云やるのみさのみ無理とは思はれぬ。地色の變るも變らぬも絹には依れどさりながら。氣に懸るのは入らぬ物是も厭とて下に置く。地色藤七お染が脇顔をつくくんと打守り。扱むつかしい客人かな左程物好き有るならば。雛形書いて後よりも御目に掛けんさりながら。詞三井が棚に小袖は無きかと云はれんも口惜し。藏の内なる染模様。あらく語り申さんと。地側なる帳面引き寄せて。エステ一々にこそ讀立てけれ。文彌武藏野に一村。薄穂に出てて。フシカ、リ亂れ合うたる小袖もあり。フシ吉野初瀬の。花楓。今を盛りと見ゆるもあり。月の名所は。多けれど色は。様々信濃なる。姨捨山や更科の。フシさやけき月は。是ぞこの。地砥草を分けてさしもげに。磨かれ出づる體も有り。御衆の隙より唐猫の。綱を控へし女三の宮。姿を見そめて纏慕の闇に迷ふ柏木の。えもん流しの蹴鞠の庭。柳櫻に松楓。梅に

鶯紅葉に鹿。竹に雀や花に蝶離の八重菊鶯かづら。桐に鳳凰獅子に牡丹扇ながし砂ながし蟲づくし草づくし。小紋唐草ちらし紋。淺黄鹿子に鶺鴒子。紫鹿子に皆人の。ナホス心はけしの紅鹿子も候と。辯舌は足らうたり。言葉に花を咲かせつゝ。一時計語りしは。フシげに面。白うぞ聞えける。ナホス地お染につこと打笑ひ色品多き其中に。一村薄打亂れ末に逢ふとは面白い。是にせうかと穂に出づる。フシ目元が直にすゝきなり。地色乳母や仲居は口々にこちとが目には爰ら内。丸めてみんな欲しけれど何を云うてもこれ／＼に。縁遠なりし片端者。せめて五百か七百で四五十年も著るやうな。繰入縞か抜袖。フシ欲しい事ぢやと打笑ふ。地色藤七領き合點して。成程／＼それもある取なし頼む追従に。錢のあるなし知らねどもさあらばこなたへ／＼と太物見世へ行く水の。オクリ跡には／＼濡の差向ひ。地色お染はあたり見廻して久松が手をとらへ。コレ腹立さうな顔付を。なぜにしやると凭れ寄る。膝をすつと立退いて。歌嫁入衣裳を見に黄八丈。しかも心はとび八丈で。口に慶斗目と云ひもぢらせど。フシらしやもない事。云はしやりんすな。つむぎ騙そと云ふ心かと。ナホスフシ振り切る袖を引止め。地色そんな小癩な當言を俄に習やつた。詞茶屋新町へ折々に稽古にとやら人が云ふ。地あた鈍らしと睨めども。久松猶も傍目して。歌純子枕に二人がつひに。ぬめ。幻の世の中と。物が云はすぞ。フシ哀なる。ナホス地色お染は暫し思案してやうやうと今合點がいた。嫁入小袖を買はんため來たとのそのの腹立よ。何樂しみに其やうな榮耀な心を持つものぞ。憂き身を泣いて夜晝と寢て居る故にかゝ様の。詞お氣に懸けられさま／＼の御意見の上此金を。枕元に差置いてさもしいやうな物なれど。死なで叶はぬ時節にも命を延ぶる妙藥ぞ。大事にかけて片時も必ず肌身を放すなと。地涙ながらのお詞に心が付いて如何様に。そなたの衣裳調べて姿の花を見るならば。氣合もとんと宜からうと勇み勇んで來たものを。愛想盡かしなすね言葉スエテ憎や。つらやと。かこつ。にぞ。地久松はつと差俯き。詞誤りました拜みます。地もう御堪忍遊ばせと手を取交し面白う。フシ成りかゝりたる真中へ。地色皆が戻れば久松はこれ藤七殿。詞わしも正月小袖の加賀の諸白がより

羽二重の。フシ御召小紋が打とけて藍水松茶にも致さうか。地氣遣なしに現銀と小判ぐわらりと投出せば。地色乳母や仲居は膝々に何共是は呑込まぬ。詞お主が何で此金を是程は持つてぞと。地口々に咎むれば久松打笑ひ。詞イヤ是は江戸の兄貴が所務分。今朝程飛脚に請取つた銀は有切なた衆も。地目に入つた物何なりと御用にたつと大氣なる。詞も戀の口塞げ思案もなしの女子ども。夢か誠か久松殿顔もふくく福の神。年の内から若惠比須臍面に溜る水淺黄。巾着帯て品やらば脇から腹を抱帯。はんなりとした紫の帽子びらく風吹に。這ひまくやうに十兩の。金もわが身も暇乞ひ東。オクリを差して立歸る。地色道二三町。過ぎけるが二人は何か囁いて。お染は跡へ振返りまだ日が高いそなた衆は。座摩の内にて淨瑠璃を十段計聞いて居や。久松連れてわしは又法印様に來る春の。年八卦をば見てもらをこちへくと立戻る。跡先知らぬ乳母仲居慾から萬領いて。フシ合點行かねど行く袖や。地色お染久松しよぎしよぎと扱もよい首尾上の首尾。競ひ口には叔母もよし叔父は猶よし一門は。片腕程の綱と聞く渡邊筋の。其そこに。地色表屋ながらトや算見通しの法印とて。失物盜人走り者扱は相場の高下迄。合ふのも不思議合はぬのも不思議くくと云ひ囁す。旦那々の鼈被月待日待代待手。文字ふつゝかに祈禱札春の事迄片付けて。嘉例に伊勢へ年籠り。夜舟にのりの旅脚料供の茂吉が缺箱。大事にかけよ女房ども本尊々々のお鏡も。三か月様のお供も必ずく忘りやんな。詞ソレソレおれも忘れて居た。見れば最前油屋から長々とした文が來た。若し久松めが不埒など致せしとある付届。物參する門出故。わざと隠し居らるゝか。地色氣遣はしやと尋ねれば女房を知らぬ顔付に。詞悦ばしやんせさうぢやない。久松殿のあんまりと奉公振りがよい故に。仕着せの外に籠紋の帯遣すとの御知らせ。地色ほんに其文見せうものつい引裂いてとあひしらふ。詞法印悦び打鎖き。褒美の帯は龍門の瀧に喩へて立身を。地致せと有るのお壽。吉左右く満足なよう留守しやれ追付けて。目出度う春の初夢は。五日の晩ぞ樂しみやと。オクリ戯れながら立出づる。地色女房は未だ門口に跡見送りて居る所へ。久松お染いそくと笑顔作りて入來れば。なうお久しやと計にて。フシやがて

内にぞ伴ひける。地色二人は戀の中宿に日本一の首尾なれど。洗石それとも云ひ兼ねて叔父坊様は留守さうな。定めて參宮でござんしよと詞跡先奥口や。二階などへ目も遣るも。フシ晝寢の夢の場取なり。地女房は會釋して。詞成程主は伊勢の留守。けぶたい者も無い大事の事ぢやとつくりと。地互に談合しめ合うて又締め合うて。締め合うて。謀合せてござんせと挨拶すれば兩人は。さても粹かなめだかないや申しお内儀様。詞なじみもないに淫奔な娘と思うてござんしよと。地さしうつぶけば何のいの。若い時には有る習ひ氣をはつたりと持たしやんせ。今日よりしては旅他國案じたま善し案じぬも。行く先々に鬼はない弱い心を持つまいと。力つければ久松は。合點の行かぬ御挨拶憎う思さぬお心に。身の行末の事迄を思ひやつての事なれど。そこらは二段奥の間でちよつと話し。足早に。去なねばわしよりお染様内のお首尾がわるいのに。通つたやうでどこやらが未だおばこにござんすと。しらけて云へば女房はわしが詞の不思議なより。こなたの心がいぶかしい。詞内方へとて足ぶみのならぬ首尾にて出て來たる。地こな様方にあらずやと語れば二人はぎよつとして。詞何ちや内へは去なれぬとは。地斯うした事が知れたかと。ステテ頼ひ出すを押鎮め。地色女房小聲に云ふやうは。おふくる様より最前に。コレ此文を遣された。讀みます程に聞かしやんせ。詞親心にはいつ迄も童々と思ひの外。いつよりしてか久松とくさり合うたる中々を。無理に放さば淺ましき浮世の夢や見るらんと。案じ過しの數々は。筆にも盡さず候なり。地斯くとは知らず嫌入の日取を急ぐ父親の。詞突詰めた氣につゆ程も見付けられてはそもやそも。並大抵の事あらじ同じ内には置かれじと。思ふ心の一つからそれとは云はて賺し出し。路の遣ひの事なども心を付けて遣せし。外へ行かん所もなしこそ御許へ參るべし。叔父御の手前はよきやうに取成し云うていづくにも。かくまへ置いて給へかし月日も經つて言入の。縁だに切れて候はば詮事たてゝ添はさうと。地母が心を云ひ聞かせ若氣短氣の出ぬやうに。くれなく頼む。フシ言の葉を。地お染聞くより泣出しあらはづかしや面目なや。さぞやお腹の立たうのに未々迄の親の慈悲。背かぬ様に此上はお前の情ていづくにも。立ち忍ばせ

て下されと。二人は左右に取付いて、ステテ身もだえしてぞわびにける。地色女房も涙ぐみ。ヲ、尤や。フシことわりや。地色わしが思案をして置いた。あたりほとりの目も多く爰にはどうも置きにくい。詞京大佛の煙管屋にひとり姉が居られます。一先あれへ遣りませう一年半年ござつても。御遠慮の有る所ぢやない姉への文もさきから。認めて置きました是をば持つて一足も。地早や日が暮れる出さしやんせ八軒屋から乗合の。船で風などひくまいぞ着いたとあるの便をば。早速見せて下されとそより立つれば二人もまた。泪はあれど心には一所にゐるが年月に。願ふところと嬉しさに心も空に氣も空に。暇乞さへそこゝに走り出でしが。立戻り。詞夜船も只是乗せまいが其段はどうしましよ。ハテ商人のやうにもない銀で兩換なされいの。サア其銀がござんせぬ。ヤア何と云はしやる御文には。路のつかひも遣るとぢやが。但し忘れてござつたか。イヤ其銀は絹買うて乳母や仲居に帶帽子。地買うてやつたと云ひさして二人は。下に泣き伏しぬ。興醒め果てゝ女房は恨めしげなる聲を上げ。詞いかに年端が行かぬとて戀する心も持ちながら。餘といへば愚かやな世上に銀といふ物を。仇おろそかにせぬものとは今お二人の身の上ぞや。油屋殿が長者でも女房のまゝに金銀の。ならぬは町の習はしよ。地子ゆゑの闇にどの様なせつない事で調うた。銀やら知らでうは〜と其浮ついたお心では。今日より明日が覺束ない京三界へやりまして。浮つらき名を立てられても頼まれがひも有りやせん。若い同士の思込一過は野でも山にても。辨へなしに面白い世渡悪しく物事が。儘にならねば不圖したる恨みつらみに尼となり。晋道心の破衣別れ〜に成るものと。例を云ふも御意見も跡になつたる悔しさと。ステテ叱りつ泣いっつ口説きしが。中にて心を取直し上り詰めたる逸り氣に。詞鹿相があらばお袋へ言譯もなしよしなしと。抱き起してコレ〜。案ずる事はちつともない外には人も知らぬから。一先内へ去なしやんせお袋様と私が心二つの才覺を文で知らせて心よう。地添はする様に成しますと騙し謙せば流石には。十九や廿に未だ足らぬ。蕾の花の梅櫻、フシ盛り待つ木に立戻る。地色乳母や仲居は内に入り日が暮れうかと案じたに。サア〜早うお歸りと急ぐを機

會に女房も。そゝめき立つて門送りさらばゝく暇乞。逢ふ戀イ、ヤ逢はぬ戀。時分柄とて掛乞ひも心せはしき。
三重へ暮の鐘。

中之卷

地思ふ事なづな〜とこたまよび。春調へて門松も物もうの聲聞き覚え。顔も覚えて見通しの。法印御禮方々て。フシござりますると行過ぐる。地色油屋の内よりも少女子一人走り出て。申し〜法印様。詞頼みまし度い事有りとお袋様やお染様。今朝から待つてござんした。暫くお這入りなされませ。ハア御用とは何である。お盆なら春永にとお断をば云うてたも。イエ〜さうちやござんすまい。地ちよつと〜と引連れて。オクリ小座敷へにこそ通しけれ。地色母やお染は立出でて先づ以てお久しや。目出度い春の壽も。又御參宮の悦に人でも上げます筈なるを。詞店御の何のとて。主に寺のお禮さへ今日勤めらるやうな事。地御無沙汰のみに過ぎましたヤレ蓬萊よ銚子よと下女を散して近々と法印に差向ひ。詞お前も御存じ有る通りお染が嫁入致すのも。早や近々に成りまして。親父一人は悦べどもあの子は厭ぢや〜とて。地湯水も吞まず居まするを見てゐる母が心底を。御推量して下さりませ。とあつて今又變改の談合などに乗るやうな。旦那殿ではなけれども。詞護摩の牛王なが取所。お頼み申すは爰の事。音に聞えた辯舌にて滅多無性に相性が。悪い〜と云消して氣に懸けさせて給はらば。其尾に付いて色品のあるまいものとも思はれぬ。地色二世と豫たる夫をば騙すと云ふも子が可愛さ。お話し申すも恥しと。フシ杖を顔に押し當つる。地色法印は打笑ひ何より以つてお易い事。詞左様な儀は一日に。五十三頼まるゝ皆此方の商賣なり。地色燃杭に迄昨晩は丁字頭が立つたのは。是であつたと請合へば。覺えず知らずにつたりと。笑ふ子よりも見る親の。フシ心ぞ春の景色なる。地色折節亭主太郎兵衛は金持氣質目に立たぬ。袴持たせて一僕の久松連れて内に入り。詞是は〜法印様。

いまだ御慶ごけいでござります。ヤアこりやお染も起きてゐる。顔持ちなどもきつう良い。地水垢ぢみずご離取るが今日七日就いては先程法印様。是へ御入りありし故お染を側へ呼出して。此子が今年の吉凶を見て給はれと頼んだりや。詞算木しさんぎを出し懇けんに半時はんじばかり考へて。以ての外なる顔付して御笑止ごせしな儀は御息女に。大災難だいさいなんが出来ました。此度の祝言このまじが悪縁なるを無理なりに。取り繕つくろふが曲事まがこととて結ぶの神の御咎め。神々達の仲間へも觸ふが廻まわつて有る故に。祈禱も薬も手が届かぬ片時へんじも早く此事を止めよと御意見有る兎や角思つうしひ合するに。詞法印様はやうくと夜前伊勢やまへんいせから御下向ごげまう。三日が内は神明の乗移のりうつつてござると聞く。立願りだんかけた私に示し給ふと有難く。地はつとお受け申すとはや。娘が氣合けあ良うなつて常より機嫌きげんうきくと。まだ様々の不思議な事あなたへ直に御聞ごもんきと。眞顔まがへ作るも親心。地色太郎兵衛ぢしやうべゑつくと聞届ききとけ合點あひまの行かぬ氣色きしきして。神の利生は知らねども元三大師の御籤ごせんには。詞慥しじやうによいと上つたる。佛を破る罰とても當る所は只一人。疑はうなら法印殿。慮り外がわな申分まうぶんなれど違ちがひはせぬかま一算いっさん。地只管ぢつぱん頼めば懐なつかより算木取さんぎと出し置き並べ。暫しばし頭かしらを打振うつて。詞フ、ウ、一徳いっとくの水青陽みづせいやうの神木しんぎの氣を養やしやうて共に三さんの火を育やしやつ。生家しやうけの油何時あぶらいつ迄も盡つくくる事なく金銀は。子に子を産うんで千年も上々じやうじやう吉きちの夫婦ふうふ合あ。地あら目出度めいしゆやと占うふに。お染は顔の色變いろかり母は覺おぼえず聲こゑを上げ。詞コレそこな法印殿。折角さつかく人に頼たのまれた大事だいじの算さんをぐくと。置直おきちすとは御卑怯ごひじやうな。見通みとお殿だんと持も唯ただす譽ほが今いまから廢たるぞや。地お名が惜おしければ何時いつ迄も初めはつめの通とほりにおつしやれい。是なうくとあせれども法印騒ほふく氣け色しきなく。詞如何いかに様酒やまざけといふものは諸事しよじ萬端まんたんを仕損しとんふ。一杯いっぱい機嫌きげんでうかと初手はつてに置いたは町内の。鍛冶屋かじやの後家ごけと水汲みづくみの五介ごけが中を取違ちがへ。地そこで水火すゐくわの大惡緣だいく縁元來げんらい拙者しよじやが生れ付き。フシふしき阿房あへん印いんちやと嘲笑あざわらふ。地色母ぢしきぼはいよく腹はらを立て。詞イヤくさうは云はすまい。地無理は三度さんどちや置直おきちしや。サア見よくと立寄たるを太郎兵衛たうらうべゑは押隔おしへて。法印ほふいんの側わきへにじり寄り。詞寫入しやうにつた御名人ごめいじん。誠に八卦はつぱ占形うらながたは人を助くる道なれば。曲まつた氣きてはならぬ管流石くだんりやう以前いぜんはお侍おまひらひ。例れいへば一家いっか一門いっもんが果報くわくぱう引出ひきだす事にても。地色非道ぢしきひだうに一味致いさぬと坐まつたこなたの御所存ごしよぜんと。身共みどもが思案しあんと比ひぶ

れば割符より猶合ひます。とても事の今一色。お尋ね申す事がある。詞金銀出入の店卸し。昨日帳面しむる時十兩程の不足をば。大商賣の中なれば帳の付落掛方の。思ひ忘れもある事と其分にしてしまひしが。其盗手が今日は大方に知れました。地同類の義が覺東ない一算頼むと云ひければ。地色法印はつと算木をばそこ／＼に置き並べ。詞ハテあぢな事此金は。人間は取りませぬ。ム、さうであろ／＼。主をくらす人なし人間ならぬ筈の事。シテ同類は見えませぬか。イヤ何とお聞き有る人間業でないからは同類のある筈はない。貴殿のけたい當年は大類ひか大損を。なさるゝ星に當れども。年頃日頃の御信心天に通じて纒かなる。地金子に轉じ替へ給ふ守り本尊の御方便。必ず詮議御無用と云はせも果てずイヤこれ／＼。詞譽め損ひが仕る。盗んだ奴は人も人取り分けて御坊の甥。地證據を御目に掛けうかと久松を引出し。おのれ心に覺え有る。高津の坂をおりる時風に吹かれてちらほらと。あぢな身振りをしやる故心を付けて見て置いた。地其下着出せ見せぬかと込付けられて久松は。うち／＼するを無理やりに。肩脱がすれば花やかな。淺黄小袖の引かへし。フシ見る目もいとど笑止なり。地色太郎兵衛きつと脱み付け。詞さて／＼不敵な丁稚めかな。盗んで着るとは知らずして傍輩どもが云はうには。年季重ねし者どもには日野や袖の籠物して。久松づれに何事を召さると主を恨み出し。不奉公すりや身代の歪に成らうも知れぬ事。地憎いと云うて上のないたづら者と傍にある。箒押取りさん／＼に肩背厭はず叩けども。叔父は餘所見て扱はず下女もこはがり寄付かねば。お染は見兼ね驅寄るを母はうしろへ引戻し。父に色目を知らせじと立憲がれば押のけて。行かんとするを取り留め。競合ふ内も三ツ五ツ。尙飽足らず振上ぐる。箒に母は取付いてむかつにござる且那殿。詞小袖ひとつを着たるとて盗みしたとも云はれまい。地主ならねども親も有る。アレれつきとした叔父御から。して遣したとあるならば。其返答がむつかしから。よし盗んだにしたらが纒の金ではござらぬか。春の初めにいま／＼しい取分けお染が顔持もたつた今迄よかつたに。騒ぎに氣をば取りのぼし又ぞや氣色悪さうな。たとへ千兩萬兩にも娘が命は買はれまい。祈禱の代に遣つ

たとも思うて堪忍して下され。法印殿も胸忿な盗人でない久松が。打躰かるゝをまぢ〜と見てゐる所ぢやござるまい。叔父様がひに言譯の仕様もやうも有らうこと。すべに依つたら私が同類ぢやとも云つてやろ。盗の主にもなるわいの。思案を付けて給はれとフシ片手を上げて拜みける。調法印言葉押鎮め。御龜相仰せられますな。外より云うて濟まうならお前の智恵を借らねども。何の黙つて居りませう。何云はうにも慥なる證據をとられし上なれば。盗人の名は消えませぬ。久松おのれもよつく開け。身が熱いとて狼狽。同類呼はりなんどして必ず外を損ふな。斯うなる筈と諦めてお主の杖の上に死ね。親方殿も随分と力の限り打たつしやれ。地色さら〜以つて此方にお恨みとては申さぬと。フシせかぬも聲は震ひけり。地色太郎兵衛箒をかりりと捨て。とつくと坐つて。調法印殿さりとては。嬉しいこなたの御心底。あけて云はねど心には戴いてをりまする。地色子も同然の久松に盗人の名を付けられて。さぞ口惜しうござらうが。僅の金に出来心さして恥にて恥ならず。調世間にはまだ大それた横着者が居りまする。同行中に使はるゝ久松程な丁稚めが。主の娘をそゝなかし嫁入するのをうるさがり。地うつら〜と煩ふに母親は只一概に子の可愛に絆されて。浮名誹も顧みず。地よしない巧事を云ひ。悪智恵付けるも父親が知らぬと思ふ愚かやな。調とくより合點しながらも世間と義理にからまれて。見す〜死ぬるを見るときも結納を取つた先様へ。變改などはならぬ事。地色意見をすれば知るになる知りながら又嫁入すは。婿にかづける様なもの例を以て云はうなら。調値千兩萬兩の茶入茶碗に瑕有るを。隠して賣るは拘摸同然。知らねばこちに咎もなく買人もさのみ恨まじと。地色せめて心の取置きに思合せて久松を。打躰したも同類を知つても知らぬ意見の杖。打付くる手もわな〜と苦しき老の所存をば。推量あつて久松が重ねて盗みせぬやうに。御意見頼み存すると涙を隠す目の内に。親子の顔をつれ〜と。フシ守るも流石妬げなり。地色法印やがて久松を蔭元へ引寄せて。天命知らず罰當りめ。調たとへ壹錢半錢でも目を掠むるは横着者。況んや以つて是がまあ並體の盗人か。其不敵なる性根から叔父が所へのさ〜と。地盗物をば抱へて來て

隠してくれよと頼みしな。女房はどこしも自分の義理に心が弱うして。請合ひながら兎や角とてにはの違ふ事有りしは。此法印が神明の加護に預る身の仕合。若しさもなくば今日には非道仲間に入れられて。當事苦口云はれても何と返答うつべきぞ。詞夜前其儀を聞くとはや胸に早鐘つきたれど。飾の内は面々が身祝をこそ致すなれ。五日三日遅いとてさのみ鹿相も有るまいに。注連過ぎてから呼付けて折檻せんと思ふたる。地所存が今で跡になりお主の杖を身に負うて。目の前叩き殺されても。言分の無い汝をば。まだ御不便が失さらずして意見を頼むなどとの。慈悲なせつなきお詞は。犬猫にてもとつくりと耳の底へは應へる管。長う云ふには及ばぬ事幸ひ牛王を持合す。今迄の儀を改めて何たる人が勤むるとも。ふつ／＼盗みせまいとの血判をして見ませと。小刀を添へて差出せば。地色久松聲を打震ひ盗みは成程しますまい。血判は許して下されと拔差ならぬ中にさへ。戀の鎧に繋がれて。フシ離れ。難なく見えにけり。地色法印きつと氣色を變へ。詞扱をしぶとい丁稚めかな。汝は最早此坊主が。以前の武士を忘れたか。今長袖になればとて。是しきの儀を言掛りせぬとて後へ寄るものか。地是非厭ならば此小刀。喉笛に突込むと小腕うしろへ振上げて。どうちや／＼と突つかくれば。詞アイ／＼成程致します實正するか。アイ／＼と。地こちらは首肯きやあちらなる。お染は厭ぢや／＼とて。かぶり振る／＼ふる涙。泣音を母は打掛の下に隠して抑附けて。早まらしやるな法印様。憎くば打ちも躰きもし。御意見ならば幾重にも騙し賺すが宜い管を笈物を持つて無理やりな。それや胴慾と云ふものよ。牛王とやらは恐しい血判を捺して逆ゆれば。罰が當つて死ぬるといふ假令久松心をば。持直さうと思ふとも。盗仲間が聞きやせまい。死なば一所と固めたる牛王に判も捺してある。そちらの罰が當らばこちらの罰を被りて。若し久松が死んだらば同類も亦死ぬるである。跡に残つた親叔父が老木の春を慰めの。花とて何を眺むべき死んで浮名を流すのと。生きて波風騒ぐのと思ひ比べて見たがよい。人の嘲も七十五日過ぎぬれば。止むとこそ聞け珍しき顔をも活けて見るならば。目出度いなどと悦ばん死なせて後に何方で逢うて嬉しと思ふべき。例へば指が

汚いとて。切つては捨てぬと云ふものを一人の甥を殺さんとは。大賊の身もせぬ事ぞ衣着ながら無慙なる。人心やと氣息まきし。フシ覺えず。知らず。泣出す。地色至極に詰り法印は。さすが持つ手も弱々と。フシ暫ためらひ居たりけり。地色太郎兵衛近く立寄りて。謂御眞實なる意見故。得心顔を見届けてさつぱりと氣が霽れました。牛王に判を据ゑたらば盗人といふ悪名が。其身一代剝されまい。地さう極れば此内の家來にしては使はれぬ。暇を遣らば世間から太郎兵衛程の身代にて。僅の銀で久松を追出したとは心得ぬ。いたづら事ぢやあるまいか如何か斯うかと跡もなき。取沙汰などをせられては御苦勞頼んだ甲斐がない。詞元來彼奴が生付悪所狂ひをする様な。性根は曾て下げぬやつ藪入前に成りたれば。奉公ぶりがよいなどと親へ借上云はんため。地孝行からの出来心奥頼もしき所有り。恥と思はて何時迄もよく奉公を勤めよと。はや／＼云へば面々も少し落着く顔形。牛王も元の袖に入れ小刀も鞘に納まつた。フシ御代の春とぞ祝ひける。地色太郎兵衛重ねて慇懃に。まづ以つて法印様。年の始に様々の御世話ばかりを掛けました。お禮は參つて申すべし是が佳例のお初穂と。地懷よりも一包扇に乗せて差出せば。あつとばかりに挨拶も。出兼ね云ひ兼ね堪へ兼ねて。金の脈とる心さへ。泣く。／＼我家へ 三重歸りけり。

地藏めぐり道行 下之卷

ニ上り相ノ山夢に見て現に逢うて。幻に立つ甲斐。もなき妹背鳥。合つがひ離れて。跡や先。しやれた。振袖加賀笠に紅絹の紵紐。抱帯若紫のナホスフシお染こそ。上の空なる。薄化粧。こましやくれたる取成を。君に見せばやつくり木の。いく久松と云ひ交し。長地忍び／＼の寝油をとけてぬる夜の數積り神に事寄せ今日は又。地藏めぐりに託けて。春の道草爰そこと。フシ人なき道は。手を引きつ。フシ一人託ちて。行くの道。二人が仲の災難も。又は天満も遠ざかり。今日は心もよしはらの。無常の煙立身り。小オタリ西とへ東へ國分寺。突出す鐘の三つ頭。フシ數へながら

も伏拜み。頼む誓や法の舟。洩さて濟ふ細島に。かゝる鯉鮒市立て。二番に立てる。フシ大長寺信心深く行く先に。見返る人も在原の。本フシ當世男千鳥足。ちりぬれそめてゑひもせず。はや京橋を打渡り番場を見れば、い氣も暗れて心も暗れて。廣小路。彌陀正覺寺有難や。スエテ庭に作れる梅が枝に。鶯來鳴くしをらしや。フシ本尊かけたる二世かけて。變らぬ仲の羨まし。ナウあれを見や數々の。鳥も戀する色かせぐ。梢々に。飛びつれて羽と羽とを合せては。フシ今やあふむの床の内。タ、キ何うそ鳥といふも有り。扱も聞えぬ時鳥。フシ泣いて明せし。ツキユリ涙には。石の枕も朽ちぬべし。此方ばかりに思へといつそ死ねとの兼言か。偽多き人故に。あたら此身をつくし舟あこがれ。こがれ今日の今。人目を恥ぢず迷ひくる。それぢや。く。先づそれぢやいの。それ。アタルすいた御心中。儘ならぬ身をかこち草。露よ。時雨と染様と泣いつ笑うつ取亂し。ナホスフシ思ひ直して顔と顔。色の緋櫻。燃え出でてはやけ地蔵の慈悲厚く。直ぐに急げば天王寺。五番の札所。フシ是とかや。逆縁ながら六番は。遙か戌亥の法善寺。スエテ是より拜し奉る。地南無歸命頂禮地藏尊。地蔵歌哀れ拙き我等かな知らずば扱もやみぬべき。既に此理を辨へて後世をば恐れぬはかなさよ。娑婆にて慈悲の名號を一たび唱ふる功力にて。業にひかるゝ魂魄を導き給へ地藏尊。ナホスフシ所願を。爰に打納む。道頓堀の果て太鼓。いざ生玉の借り座敷うさを語らんこなたへと。心いそぐ。フシちよこくと。八幡宮の右左。爰へくと招かれて入日の影と諸共に。おくそこもなし人もなし。誰もないぞと伊豫籠二人が妾木隠の床机に。夢をや結ぶらん。フシげに大坂の。東山。千代を數へて生玉の。社は殊に春めきて。常磐に見えし萬歳も。能も放下もわつざりと。フシ聲若やかに立渡る。地色お染は跡を振り返りコレく久松あれを見や。詞アノ看板の書付に。お染久松祭文とは。地餘所にも丁度同じ名があれば有るものさりながら不思議な事と立止る。久松は打笑ひ廣い世界に同じ名も。同じ戀路もあるべきが歌に歌ふはこちとより。切ない事があるであろ。ごさんせちよつと聞きませう。如何にもおれもさう思ふ餘所の久松器量さへ。そなたにちつと似たならば。餘所のお染もてつきりと。

フシ惚れたてあるともたすれば。地色成程餘所の久松はわしより鼻が高いげな。餘所のお染に此様な。鷹たかは無いと戯れて立寄り開けば錫杖しやくじやうの。聲無常めく祭文まついもんに。祭文まついもん所は都の東堀ひがしほり。聞いて鬼門きもんの角屋敷かくやしき。瓦屋橋かはしちやとや油屋あぶらやしの。獨娘ひとりむすめにお染とて。心も花のナ色ないろざかりの。オクリ年は二八にやちの細肩ほそかたに。ナホスフシの子飼こがひの久松が。太夫地二人ははつと走りの。木蔭きかげに顔を突合せ此身の上を何者か。爰こゝ持て来て歌はすとそなたは心が付いたかや。詞おれが思ふはとゞ様の昨日きのうの様におつしやつても。思ひ切りそに見えぬ故戀こゝろが募れば此様に。地口にかゝるといふ事を入頼いりたかひして御意見ごいけんの。廻者まわしではあるまいか。詞イ、ヤさうではござんすまい。こちとにさへも打明けぬ深い旦那の御心で。出所でしよの沙汰さたには成されぬ筈。こりやお袋ふくろの才覺さいかくで。浮名うきなが立たば縁組えんぐみの先から變改へんがひするである。そこでは私わしとお前まへとを。地女めづめにせうといふ事ちやと仇願あだなみなる早合點はやあひてん。フシ又も葦簀あしすいに立寄れば。祭文まついもんへこなた嬢ぢやう入嬉いししかる。わしは生きても死んでもちや。たとへどの上に云はしやると。誠まことがあらば縁付えんづらは。ナホスフシなされぬ筈と云ひければ。地アレ聞かしやんせお染様わしが心の恨いらいをば。云はねど知つてお前まへをば不心中ふしんちゆうなと云ひはやす他人の口の恥しと。フシくねり掛かれる女郎花ぢやうらゐはな。地色お染は顔を打赫うため。そなたの心を知るからはおれが思うてゐる事も定めて知つて云ふである。この跡聞あときこいて其上そのかみで悪くば詫言わびごせうわいのと耳みみを寄すれば祭文まついもんは。今いまが哀あはれれの最中さいちゆうと。スエテ語るも聞きくも涙なみだなり。祭文まついもんへ勿體もつたいない事何として。お主様おなごをばわしが手にかけられましょと云ひければ。お染涙なみだにくれながら。何の我身わがみの。殺しやろぞ。跡あとを頼たのむといふ聲こゑも。ナホス地南無阿彌陀佛なむあみだぶつと諸共しよごに。スエテ終つひに自害じがいし果はてにけり。太夫地二人は興きようも覺かくめ果はてゝ臆おそてかしこへ立隠たひかれ。顔かほ見みせてうつつかりとさりとは何といふ事ぞ。此身こゝろは爰こゝに息災いきさいで連歩れんぷくのにまざくしい。嘘うそつくとも事ことによる。年としの始はじにいまくしい人目ひとめ愛目あいめも思おもはれぬ。往いて強請きやうせいらうか喚わめこかと。うろくせしが久松は。地心を鎮しづめ小聲こゑになり。詞ことばいや申しお染様お染様。あの者ものどもが云ふ事を。嘘うそと思おもへば嘘うそなれど誠まことに聞きけば皆誠みなまこと。お前まへとわしが身の上みの上をよう思案しあんして見みますれば。不思議ふしぎな事ことちやござんせぬ。叶かなはぬ事をくどくと御苦勞ごくろうかけに物詣ものまき。地色神ぢいろかみや佛ぶつのお心こゝろにと

でも死なねばならぬ身と。人に教へて行末を知らしめ給ふと合點すりや。長くも生きぬ此命最早死んだも同然と。思ひながらもがつくりと手足もなえて悲しやと。スエテどうど坐つて泣出せば。地お染もわつと聲を上げ實にもほかなき我々かな。命はいつを知らねども此大坂に幾人か。今迄心中多けれど死なぬ先から此様に。唄繪草紙に載せられてわが亡き跡をわが聞いて。泣くと云ふのは古も。フシ又後の世もよもあらじ。地色たとへ心中するとも跡に心は残らねど。おいとしいのは母様のとつとおいつも苦になされ。お氣の短い父様へ此事知れぬ様にとて。蔭へなり又日向へなり。御意見あるも聲低う。涙交らぬ事はなし我はいかつな口答。詰る所は死にますと。いふりを出せば氣遣うて夜着に巻かれて寢ずの番。憂き苦勞をばさせませし親の割でも行末の。よからう様には思はれずよしは死んでも添ふ事が。なればよけれどあの世をば見た人もなし言傳が届くも知らぬ片便宜。心元なき冥途やと。久松に抱付きフシ身を寄り。伏して泣き惑ふ。詞ヲ、御尤先の世は。私とても知らねども。折々旦那の御供して。談義の上で聞きました成程地獄も佛も有る。大きな蓮葉の其上に女夫は並び居て。寒い悲しい事も無う千百年も居るげなが。地二つ取には此世にてせめて一年半半でも。主よ女房と云ひ云はれ所帯とやらがして見たい。百萬石の大坂に身の置所なき様に。心苦しい我々が憂をばせめて忘れうと。爰へ來たれば此憂目聞けばとにかく死神の。行く先々へ付廻り。催促するか責むるのか。最早宮へも參るまい。スエテ歸りませうと手を取れど。地色お染は更に立上らず。出にくい内をぬけ隠れ。又戻つては色々の辛い事をば聞くてある。いつその事の出ついでに。日は暮れようとも明るくとも浮れ歩くかさもなくば。連れて退く氣はないかいの。詞ア、扱扱はぬ事ばかり。行く所ありや何時ぞやの折にどこへも退きます。お袋様の下されし命を延ぶる妙薬の。金とてもなし知るべはなし。地死ぬる時節を待たうより外に思案はござらぬと。互に袖を取交し。立ちては泣いて居ては泣き。フシ泣くや涙のきぬくの。フシ別れをつぐる。鳥ならで。晝突く寺の鐘の音に。身はかげろふの有りやなし。胡蝶の夢と覺めはて。宮居と見しは本來の。空に歸るや石の

火の。光乏しき油屋の我住む内とへなりにけり。

地色帳場ちやくばに眠る久松はむく／＼と起上り。胸押しさすり思をつぎあたりほとりを見廻して夢は夢ぢやが現にも佛おんがらは猶忘られず。お染様はどこにぞい悲しい事を見ましたと。語りもしたし顔ばせも今日又見ねば懐なつかしと。人に心をおくの間の。ステテ障子を戀の八重垣やえがきに。妻や籠れる久松も。爰こゝにいるさの月影に。横雲かゝるばかりにて。フシ立ち煩うてゐる所へ。地色山が屋よりも呼使五郎八は走り來て。詞旦那様お家様お染様をば連れまして。お早うお出なされませ。相伴衆けんどうしゆは待ち兼ねて汗や着物の加減さへ。地違ひますると追々に呼びにぞきその山が屋の。フシ使は早く歸りけり。地色太郎兵衛夫婦立出てて日がたけたものさうである。娘は着物着替へたかお染。お染とせはしなう呼び立てられてあい／＼と。明くる障子の髮形取繕はず何事を。泣き脹したる目元して。詞かゝ様わしは往きますまい。假寝の夢に思はしい辛つらさにいかう泣いた故。地今につぶりがふらついて。どうも起きて居られぬと顔差入る襟えりの下。そつと覗けば久松も同じ夢みた顔形。フシ云はねど。胸に應へけり。地色母も心にかゝれども。笑顔作つてホ、／＼ホ、。詞をかしい事をいふ人かな。夢は逆夢どの様な悲しい事でも此母が。判じ直してよい様に目出度う解いてやりませう。今日山が屋の振舞はこちとは假令そなたをば。呼びたいからの造作をば行かぬと云ふも愛想あいじやうない。地ちつとの間往てつひ戻りやいざやと云へば太郎兵衛は。詞ソレ／＼。母がいふ通りおぬし一人が正客せいきゃくで。れつきとしたる二親は御機嫌取りの太鼓持。地指の股でも廣げうに兎角心をわつさり。持つが物事目出度いの。焼物焼鳥取分けて。料理は自慢たら汁と。オクリ勇みへ謙して行く跡の。愛身は何と。地久松は。常磐とこがねにあらぬ常磐木と。フシ變らぬものは涙なり。フシ春の日かげは。明けき。折知り顔に梅の花。ありとや爰に鶯の鳴音は月日ほし蕪菁。年頭歳暮の御禮をば一荷に荷ふ薬やく春は。野崎村の久作が。フシ物もうとこそ言ひ入る。久松は立出でて。詞ハア親父様ござつたか。今日は屋内が振舞にお出なされて誰もない。地こちへ這入つて草鞋わらじの。紐も解く／＼お休みと。オクリ連れ立ちへ内

に入りにけり。地色久作きよろ／＼見廻して。御夫婦共に留守さうな。調見ればお上に錢箱や懸視など引散し。和御寮一人に留守させて。出歩かる／＼はよく／＼に。奉公振がよいものと。嬉しい／＼さりながら。おれも今年は六十二。何時まで田畑せゝつても切れ變つたる果報をば。掘出さうとも思はぬ故おぬしに世をば打任せ一枚敷でも取圍ひ。寝起を樂にせう爲に隣の茂四郎が狩獵者。おくめを嫁に貰うて置く。地色おぬしが暇も貰ひに來た旦那へ禮は付けたりと。落着顔に言出す久松はぎよつとして。調成程さうもござらうが。わしが年季はまだ三年是から先が御奉公。留守も預り外向の御用にも立つ最中に。地そんな事をば云はしやつたら旦那が腹立致されう。お留守の内に歸しらやれフシ早う／＼とせりかくる。地色久作は打笑ひ。調イヤ／＼そこは氣遣すな。縁故や其身の浮むには。どつこの山椒太夫でも悦び暇をくれるもの。地旦那に云ふと早速に暇は扱置き着おろしの。袴肩衣貰うて見しよ。久松は氣色を變へ。如何にこなたが文盲な土百姓でも相應の。義理と法とは立てるもの。七ツの年に内方へ連れられて來て正眞の。西も東も知らぬ内御夫婦様の世話になり。手習算盤其間に四書の素讀も習はして。今獨食する迄は親より深き御恩をば。禮奉公とも云はずして年季の内に出られうか。旦那は合點しられてもわしが去なぬと云放す。久作側へ差寄つて。調親方殿のお蔭にて物讀もした證やら。さつぱりとした挨拶の。道筋立つて面白い。おれは無筆の明盲何の差別も知らぬ故。主の娘を勾引して淫奔かかく學問は。地尙かし聞きも習はぬと腕付けられて久松は。調ソリヤまあ何をおつしやると。地云はせも果てずヤア評ふまい／＼。調おのれが身持の有りたけの底を叩いて法印に。皆たつた今聞いて來た。扱々汝は憎い奴。一人の親に差向ひよう悪口をぬかしたなあ。地土百姓はするけれど子を盗人には産付けぬ。恥を思はゞ其儘に在所へ逃げてはなせ戻らぬ。主に憎まれ傍輩に汚れた頬を押拭ひ。娘御寮やお袋の機嫌を取つて此家の。跡してやらう慾心か。調品に依つたら其様な首尾にも若しはなつた時。打擲した父御前は。結句諦めもよからうが。蟲眞召さるゝ母殿の心の内には汝めが。地喉のあたりへ喰ひ付こか。刃物を持つて身の内をば。切りさいなんて

も棄てたかる。詞なれ共こちらを痛めれば。あちらのわちよがあたけ出し。地死のの生きよのに持餘し花香もあらぬ祝言に。隣あたりへ歴々の婿や舅の通るのを見る度毎にくし〜と。娘一人をむぎ〜と棒に振つたは久松の。犬め故ぢやと果てしなく。一生睨み付けられれば金の中から目見出すと。何が手柄に成る事ぞ。詞アノ法印めが事を見よ。兄弟なれどおれよりは智慧も器量も勝つたと。二親達が自慢して武士の養子にやられたが。それも仕遂げず今は又。あぢな商賣目論んで。上下小袖ひつ違へ衣の肩はいかれども。地おうた門をばひそ〜と肩身すばめて通るげな。地色其内證の苦しさは思ひ遣るさへ。笑止なり。在所住ひの氣散じは腰を屈める相手もなく。惡所す〜める友もなし榮耀噴こそ不自由なれ。乏しい月日はつひにない。人間一生安樂な親の家をば讓るのを。厭とぬかすか罰當りめ。詞其性根とは知らずして此冷たいにおれを見よ。素足で居れどおのれめに穿かさう爲に此足袋を。地持つて來たのが悔しいと振上げ〜七ツ八ツ。さん〜に叩き伏せさあ無念なか。口惜しいか。詞親の叩くは慈悲の杖。主の打つたは憎しみの。杖をした〜か受けたげな。地親子二人と分つても木に譬へれば子は枝よ。枝を叩けば木の本の親に當つて苦しいと。スエテしやくり上げたる。久作が胸の。内こそせつなけれ。地色道理に迫る久松は。親の顔をば打守り。とかう答へもあらばこそ浮世の中に我程な。不幸な者はあるまいと。フシせき上げ〜泣き居たり。詞久作愈々腹を立て。不幸と自身知つてゐる人では手がかつかぬ。地色子と思はねば濟む事ぞ七生迄の勘當と。顧みもなく言捨て、立たんとするを久松は。裾に取付き引止め。詞我と不幸と申すこそ。地背くまいとの詫事ぢやさりとて赦して下されと。手を合すれば久作は。詞ヲ、それで我子よ可愛子と。地引寄せ〜撫で摩り。フシ乳も吞ませたき氣色なり。色地稍あつて立上り思へば留守へ入込んで。惡智慧などを付けたかと親方殿に思はれては。暇を願ふ邪魔になる平野町迄往て來るぞ。着類半がへ取りおかば篤と我物人の物。見分けて雪駄片足でも。さもしいなと云はれなと急いで出てしが何とやら。心が〜りてうぢ〜と又立戻り。コレヤ久松。詞なんば悲しい事にて。三日四日の水離れ。宿のおくめ

が縮髪ちぢみかみ。地見てや止やみなん葛城かつらぎの　　オクリつらき　別わかと　フシ後ぞ知る。地色久松は只うつかりと夢と現まの悲あはしさは。思おもひ比べて思案して。見れば見る程ほどどうしても。死なねばならぬ身の上を。二つ取には諸ちか共に。死んだ夢こそ増ましならぬ。スエテ覺めて悔しと泣き惑まどひ。地色兎角する間に人や來ん親や戻りて此上こゝの。憂目や見んと急がはしく。硯と紙すずりを持ちながら　　オクリ心の　闇路やみち暗くらきより。フシ藏くらの窓こそ。極樂ごくらくの。東門とうもんなりと伏拜ふくはいみ。佛様よりお染様姿婆しよばのお顔を今一度。見たやと思ふ一筋に。心や行きて誘まひけん。地色お染はひとり駈か戻れば。久松窓より顔出して。詞もう私は覺悟して只今爰こゝで死にま。する。ヲ、さうである。地色我も假睡かりねの夢ゆめの内心中したと思つたは。神や佛の御み導みちびきそれを語つて諸共に。死なうと思ひ極めて來た。なぜ藏くらの戸を明けやらぬぞ。詞イエ／＼爰へござんすな。二世とは云へど親達の許さぬ内に御み一所いっしょに。地死ぬればわしは主殺しあひも變らぬ夢の内。云ふ事聞く事語る事皆盡果じんくわてて魂たまは。連れて冥途へ往たである今の身體からだは空蟬うつまの。空はらしき此世を恨みても。泣いても最早歸らぬ事さらば／＼といふ聲も心もさすが細引ほこひを。首にくる／＼ひん巻けば。お染も何の後れうと。剃刀出して忽くはに紅流くわうりゅうすみつせ川。地冥途の坂に久松も哀あはれと消ゆる春の雪。白きを見れば死顔しがほの一つ蓮れんの生如來なまじよ。さかさま事の弔なぐさひに死光しひかりする燈火ともしびや。お手の物なる油屋と。樽たるにしるして國々の。其國々の果迄も言ことの。葉草はくそうとなりけり。

おそめ
久松袂の白しぼり終

